

府中市史編さんだより

第4号 平成29年(2017)11月8日



明治初期の多摩川を描いた絵図「武蔵国玉川水源ヨリ流海面羽田浦マテ両縁画図」(個人蔵)

ふちゅう温故知新③

四谷 (よつや)

「四谷」の由来

四谷は市域の南西部にあたる地域で、江戸時代の村名がそのまま現在の町名として残っています。地名の由来は、家屋が四軒あったためという説がありますが、はっきりしたことはわかっていません。

四谷の地名が登場する古い記録に、戦国時代の元龜4年(1573)の『北条家虎朱印状』がありますが、その中に駿河国八幡郷(現静岡県清水町)の農民が「四屋」に欠落ち(逃亡)したという記述がみえます。江戸時代の記録には「四ッ谷」「四ッ屋」と書かれていることもあります。

多摩川の洪水と四谷

四谷の歴史は、多摩川と深く関わっています。江戸時代の初期には、多摩川の洪水により耕地が流失しました。江戸後期の記録『新編武蔵風土記稿』では、寛永4年(1627)に甲斐国八代郡市川上の宮(現山梨県市川三郷町)から当地に移住した市川上之宮内匠という人物が、再び四谷を開墾したと伝えています。

江戸時代の中頃には、内匠の子孫が多摩川原で新田を開墾し、荒地だった場所を耕地に変えました。耕地の広がりとともに、多摩川の水を農業用水として利用する仕組みが整えられます。宝永4年(1707)に「四ッ谷村外(ほか)ニヶ村組合用水」が生まれ、四谷村に中河原村(現住吉町)と連光寺村のうち下河原(現南町)を加えた村々が、多摩川に設けた同じ取水口から用水を引いて各村へ分水していました。

近代に入り、明治23年(1890)には、多摩川の洪水により堤防が決壊して耕地や家屋に被害が出るなど、現在のような堤防が築かれるまで四谷はしばしば水害に悩まされてきました。

四谷の古文書調査

府中市史編さん担当では、四谷の旧家の調査をすすめており、地域の歴史を知る上で貴重な古文書などが新たに発見されています。今後の調査では、古文書や古い絵図を詳しく読み解いて、四谷や多摩川の歴史をさらに調べていく予定です。

「古代の役人たちの生きざまから武蔵国府を考える」

原始・古代専門部会長・日本大学文理学部教授
中村順昭先生

このコーナーでは、市史編さん専門部会の部会長の先生にインタビューをしています。

今回は、原始・古代専門部会の中村順昭先生から、お話を伺いました。

興味深い古代の地方の役人たち

事務局：はじめに先生のご専門と研究分野についてお伺いします。

中村：大学院生の頃は、おもに奈良時代の平城京の下級役人のことを研究していました。正倉院文書にある写経所で働いているような人たちの事です。その後、地方の下級役人。国司や郡司よりも下のレベルの、現地で働いている人たちのことを研究しました。そのきっかけは、神奈川県海老名市の宮久保遺跡で木簡が出土し、それに鎌倉郡の田令（でんりょう）、郡稻長（ぐんとうちょう）という職名が書かれていたことでした。

事務局：地方の役人に関する事で、なにかおもしろいエピソードなどございますか。

中村：武蔵国府のことではありませんが、地方から木簡がずいぶん見つかるようになりました。木簡が発見される以前は、古代の史料は正倉院文書などや公の歴史書といった都に残った史料ばかりで、その中で荘園関係のものなどに、地方のことが少しわかる部分があったのですが、地方の遺跡から出てくる木簡は、地方で使われ地方で捨てられたものです。都に伝わるような記録ではない史料が見つかってきたことが、研究をおもしろくしています。

地方で捨てられた木簡にみえる、地方の役所が役所でないかわからないようなところで働いている、ごく普通の農民とも少し違うし、正式な役人でもなさそうな人たち、これがいったいどんな存在だったのか。これが、私が考えている問題ですが、木簡が見つかる以前から知られている史料、たとえば東大寺の越前国の荘園関係の文書にみえる、いろいろな人たちと関連づけて考えることが出来るようになってきています。

東山道から東海道への編成替え

中村：これは武蔵ではなく駿河のことですが、

駿河国の正税帳という文書が断片的に残っていて、そこからは隣の国まで文書を運ぶ“使い”になった人とか、駿河国を通過したいろいろな国の関係者のことがわかります。同じような人たちは、当然武蔵にもいただろうと思います。

武蔵の場合、奈良時代の半ばまでは東山道に属していて、東山道から枝わかれした終点みたいな位置づけだったわけですが、奈良時代の後半に東海道に編成替えになってからは、東海道の他の地域と都を行き来する人が、武蔵国を経由するのが公のルートになりました。

東海道に編成替えになる前から、たぶん武蔵国を経由する人は多数いたのかもしれませんが、公のルートとして武蔵国を通ることになったことでどんな変化をしたのか、とても興味深いところです。東海道に編成替えになったことは、昔から知られていることですが、そういうなかで下級役人たちのことを考えてみると、編成替えがどういう意味を持つのか、興味深い問題になると思います。

事務局：役人たちが、道路を使うケースが多くなったから編成替えになったのでしょうか。編成替えになったからその道路を通るように改めるのでしょうか。

中村：おそらく使われることが多いから、それが公のルートに替っていったのだろうと思います。奈良時代の前半でも、先の駿河国の史料に、下野国に行く人が駿河国を通過しているという記録があります。下野国は東山道のメインルート上なのですが、駿河国を通過しているということは、駿河から相模、そして武蔵を通過して下野に向かったこととなりますので、おそらく下野に行く人たちも、東海道を通過して武蔵を経由することがあったのだと思います。そういう事実があるから、武蔵を東海道に入れるということになったのだと思います。

そのように考えると、東海道が使われているのに、なぜ最初武蔵は東山道だったのかという逆に疑問が出てきます。これまた昔からの大きな問題で、なかなかわからないところがありますが、ヤマトのワカタケル大王との関わりを記

した銘文をもつ鉄剣が出た稲荷山古墳は、さきたま古墳群にあり、武蔵北部に位置します。たぶん古墳時代はそちらの方に有力な豪族がいたはずなので、上野（こうずけ）とのつながりもあり東山道に属したのかもしれませんが。ただ、それであればそちらに国府が出来てもいいはずですが、なぜ多磨郡の府中のあたりに国府が出来たのだろうか、というのもよくある疑問で、なかなか答えられない難問で、今度の市史でも答えは出ないかもしれません。

武蔵国府の実態とは

事務局：国府には国司を頂点とした高級役人から下級役人までたくさん役人がいたというお話でしたが、だいたいどのぐらいの人が国府にはいたのでしょうか。

中村：どのような種類の人がいたということは考えられますが、それがいったい何人ぐらいかということになると、なかなかわからないところですよ。

たとえば、国司の長官がやってくると、お付きの人が何人も付いて来ているはずですよ。ただ、それがいったい何人ぐらいいたのか、国司の館に何人ぐらい住んでいたのかとなるとわからない。それから、たぶん武蔵国内のいろいろな郡から人が来ていると思うのですが、それが定住しているのかもわからない。律令制には雑徭（ぞうよう）というのがあるんで、その決まりでは60日働かされることになっているので、60日だけいて帰る一時的なものなのか、あるいはもう少し長くいることもあったのか。雑徭で働かされている人には、半ば役人みたいな立場の人もいますので、その辺の人がどのぐらいいたのか。数まではなかなか推測するのが難しいところですよ。

事務局：役人の数は難しいということですが、国府の施設についてはいかがでしょうか。

中村：国司は、守・介・掾（じょう）・目（さかん）、その下に史生（ししょう）というのがあります。国司館にはみんなが一緒に住んでいたわけではなく、それぞれが国司館を構えていて、そこにそれぞれ下働きの人たちがいたでしょう。それからいわゆる役所、事務をやる場所ですが、これも国司に関わるものの他、それぞれの郡の出先機関のようなものもあったらと思う。ほかに、いろいろなものを作る工房、これは国府の中とは限りませ

ん。国府の周辺かもしれませんが、鉄製品を作ったり、漆器を作ったりといった工房もあったはずですよ。それに、実態がよくわかっていませんが、国学（こくがく）という学校があったはずで、ここで郡司の子弟が学ぶことになっています。

このように国府は、武蔵国の行政センターのように、いろいろな郡から人が集まって来るような場所になっていただろうと思います。

ただ、学校がどのような建物だったのか、学生が何人いたのかがわかっていません。全部の郡から何人も来ていたとすれば、百～二百人規模になりますが、学生が一人もいない郡もあるならば、数人規模の小さな塾みたいなものだったことも考えられます。郡の出先機関も、何十人もいるのか、二・三人しか来ていないか、この辺をどう考えるかによって、国府の人口や様相に関することも想像がずいぶん変わってきます。

それと、付け加えておきたいことですが、武蔵では国府がずっと残って、中世の府中に続いていきます。国府があった場所が必ずしもどの国もそうではなくて、たとえば下野の国府では、かなり早い時期に衰退していったようで、今は畑の真ん中になっているわけですが、武蔵の場合は中世の府中になり、さらには近世の宿場となって、ずっと続いています。これは武蔵府中だけではありませんが、そういう国府が始まりでそこから続いていく地域と、かなり早い時期に消えていってしまう地域。この辺、どこがどう違うのかということも知りたいところですよ。



中村順昭 先生

が、これまた難しい問題なんだろうと思います。

おそらく続かなかったところは、国司の役割が分散化されていった、あるいは国司の拠点がよく動いたといったことがあったのかもしれませんが。また武蔵は東海道に組み入れられるといった交通事情、交通の要衝、便の良さ、それは道路だけでなく多摩川も含めてだと思います。ただ他の国府では交通の便が良さそうな立地でも衰退していくところもありますので、利便性が良ければ続くとも言い切れません。国司の一族の土着も武蔵に限ったことではないので、なぜ武蔵が続いたのかというのは、これらの理由の組み合わせにあるのではないかと思います。

前回と今回の市史のつながり、そして課題

事務局：最後になりますが、中村先生は、前回の府中市史で古代を担当された土田直鎮（つちだなおしげ）先生が恩師だったと伺っています。新たな府中市史を編むにあたって、この50年間の課題や、土田先生の思い出などをお聞かせください。

中村：土田先生が前回の府中市史を手がけられたのが1960年代。私が大学に入ったのが1970年代ですので、大学に入る前の事です。実はずいぶん後になって土田先生が府中市史を手掛けられていることを知りました。土田先生は私が学生だった頃には、平安時代の特に貴族社会のことについての専門家として知られていて、府中市史を手がけられているのと同じ頃、中央公論社の「日本の歴史」で、『王朝の貴族』を書かれていて、そちらの方が土田先生の専門分野だと、ずっと思っていたのです。その後、これもずいぶん後になって、鎌倉の中世などの論文を書いておられたことを知り、とても幅広く研究され、これが前回の府中市史古代編が、とてもよく出来た理由であったと思っています。また府中市史そのものだけではなく、市史の編さんの時期に講演をなさっていて、それがお亡くなりになってから、『古代の武蔵を読む』という本にまとめられています。私も本にまとめられてから初めて読んだのですが、これは文献史料をどう読み解くかということでは、とてもわかりやすいもので、ここで書かれているようなことは、今回の市史でも大いに活用すべきことだろうと思っています。史料からどのようなことを読み取るのかで、模範になるような本だ

と思います。

前回の市史は1960年代のことで、その後府中市では国府の発掘が飛躍的に進み、現在はずいぶんわかってきていますが、前の市史段階では、国府があるのはわかるが、中心部分がどこかは全然わからない状態でした。他にも、武蔵国の範囲でいえば、先の稻荷山古墳の鉄剣銘文の発見がありました。また東山道武蔵路の発見とその調査がずいぶん進み、郡の役所の遺跡もいくつか見つかっています。もう一つ、武蔵の国府だけではなく、他国の国府もずいぶんとわかってきました。近くでは下野の国府。ここも長らく所在地がわからなかったのが中枢部分が発掘され、しかもそこからかなりの数の木簡が出てきました。東国以外の地域でも、近江などで国府の中心部分がかなりはっきりわかって、国府の研究が全国的に進んできています。

国立歴史民俗博物館で1980年代に国府の共同研究が進められ、報告書も何冊かまとめられ、これなどで全国的な国府の研究が進んだということがあり、国府に関しては、50年前の土田先生がまとめられた頃よりは、ずいぶんと情報が増えている状態です。それをどうやって今度の新しい市史にどれだけ活かしていけるのかというのが、課題になるだろうと思います。

事務局：国府の成立と共に、国府がどのように続いて現在につながったのかも、大きな問題だと思います。今回の市史で、これは絶対に取りあげたいということはありますか。

中村：なんとといっても、発掘調査の成果と進展を十分に取り入れることです。これは府中市域のことはもちろんですが、他地域でわかったことも取り入れることが必要です。

それから、府中市の市史ではありますが、武蔵国府を取りあげることから、武蔵国の歴史ということで取り組んでいくこととなります。府中は国府の場所ですから、国の役所ということだけではなく、郡との関わりについても、いろいろな方が研究しています。そういう新しい研究をふんだんに取り入れられたらと思っています。国府の歴史という観点では、成立のことだけでなく、中世までのつながりを含めた歴史ということで、国府の実像を明らかにしていき、全国の国府研究の最前線になるものにしたいと考えています。

講 演 会
平和のつどい講演会

「命の便り」といえる軍事郵便を読む」

を聴いて

8月5日（土）に府中グリーンプラザのけやきホールで開催された「平成29年度府中市平和啓発事業 平和のつどい2017」において、近・現代専門部会長の新井勝紘先生が「命の便り」といえる軍事郵便を読む」と題してお話しされ、当日は347名の方が参加されました。

今回の講演のテーマとなった軍事郵便とは、軍隊に従軍した兵士と内地の家族等がやり取りした郵便物のことです。戦地の兵士が出す郵便は無料でした。明治27年（1894）の日清戦争をきっかけに制度が確立され、昭和20年（1945）の終戦まで続きます。日清戦争では約1240万通、日露戦争では約4億6千万通もの郵便が出されたといわれ、約半世紀の間に出された総数は計り知れないそうです。

これだけたくさんの量の手紙がやり取りされていたにもかかわらず、軍事郵便は資料として近年まで日の目を見ることがありませんでした。それは、兵士個人の文書であり、内容も検閲を受けた紋切り型のものだろうというイメージがあったからでした。

今回の講演にあたって新井先生が作成された資料では、実際の軍事郵便の中から、幼い子供も楽しめるようにイラストとカタカナで書かれた手紙や、小さな文字でびっしりと可能な限り伝えたいことを書こうとした手紙などが紹介さ

れました。府中から出征した兵士の手紙では、一通一通が兵士の詠んだ詩で締められているなど、手紙を書いた一人一人の息遣いや個性がにじみ出ていました。

戦地の兵士にとって、故郷からの便りは非常に待ち遠しいものだったようです。それは、手紙を受け取って満面の笑みを浮かべる兵士たちの写真からもうかがえました。国もこの軍事郵便の役割を重視しており、頻繁に戦地の兵士へ便りを送ることを推奨していました。兵士の家族にとっても、兵士からの手紙はまだ生きている証であり、文字通りの「命の便り」となっており、一通一通が当事者にとっては大事な存在だったのだと新井先生は言います。

最近になって、こうした軍事郵便の資料としての貴重さが認識され、収集や保存の動きがようやく活発になってきたそうです。近年の自治体史でも必ず軍事郵便は取り上げられるようになってきています。しかし、まだまだ緒についたばかりで、個人や団体の努力に頼っている面が否めないそうです。次第に戦争体験者やつながりのある人々が不在となっていく中、たくさんの手紙に込められた「命」が途切れるか、未来に残るか、まさに現在はその瀬戸際にあるのではないかと感じました。

（近・現代担当）

市史講演会のご案内

市史編さんで進めている古文書調査の成果を、市民にご紹介する市史講演会を開催します。講演では近世専門部会委員が、江戸時代の府中宿についてお話しする予定です。当日は、同会場にてパネルによる古文書の展示を行います。たくさんの方のご来場をお待ちしております。

◆開催日／平成29年12月16日（土） ◆場所／市民活動センタープラッツ
第2会議室・第6会議室（ル・シーニュ5階）

【講演会】（※要申込み）

◆時間／午後1時半から午後4時

◆講師／吉田ゆり子氏

（東京外国語大学・府中市史近世専門部会長）ほか

◆申込み方法／11月21日から12月14日

電話で市史編さん担当（042-335-4376）へ 先着70名。

【パネル展示】（※申込み不要）

◆時間／午後1時から午後4時半

◆内容／市史編さん事業と

古文書調査の方法について 昨年の市史講演会の様子



専門部会通信

前号以降の、専門部会の活動について紹介します。

原始・古代専門部会

文献と考古の2つの分野会を設け、まずは市史資料編の作成に向け作業を進めています。文献の分野会では、史料採録で集まった史料に、和歌や物語などの文学史料も加える作業を進めています。また採録し、掲載を決めた史料について、綱文(要約文)や訓読・解説を付ける作業を進めています。考古の分野会では、いろいろな出土品がどこで見ついているのかの一覧表を作成しているのと、見つかったものが、市内のどこから出土したのかがわかる市史用の地図の作製を進めています。いろいろな出土品によって、市内のどこで見つかる傾向があるかなどがわかれば、例えば国府の時代、市内のどの部分がどのような役割をもっていたかが推定できるかもしれません。文献分野会開催3回。

中世専門部会

中世部会では、史料の収集・入力作業を行なっています。それと並行して、刊行物「資料編」の体裁や史料の掲載方法について、さまざまな検討を重ねています。市民の方に見やすく、かつ学術的な使用に耐えうる「資料編」づくりを目指しています。

3月には部会委員の学術研究の出張の機会にあわせて、滋賀県大津市の天台宗典編纂所において史料調査を実施し、「武州府中」と記された鎌倉時代後期の史料を閲覧しました。これは府中市を「府中」と記した現存史料としては、かなり早い段階のものと考えられます。

また、天台宗典編纂所所員の方々と意見交換会の場を設け、関東における天台宗の歴史を知ることが出来ました。中世の関東天台宗を考える上で、仏教教学を学ぶ「談義所」の役割は極めて重要であること、その中心には談義所が設けられた府中定光寺と、そこを拠点とした等海という僧侶の活動があったことなど、大変興味深いお話を伺うことが出来ました。部会開催1回。

近世専門部会

近世部会では、市内の古文書調査を引き続き進めています。今年度の調査では、旧多磨村の神社の古文書や、江戸時代に村役人を勤めていたお宅の古文書が見つかっています。現在は、

それらの古文書の整理・目録作成作業も進めています。

部会会議では、刊行物「資料編」に掲載する史料を選びながら、新しい市史のイメージを膨らませています。部会開催3回。

近・現代専門部会

近・現代部会では、ふるさと府中歴史館で保存している行政文書の整理を進めるとともに、市役所保管の議会資料や郷土の森博物館所蔵の家文書から、近・現代の府中に関わる資料を網羅的に収集しています。また、市民の方からも所有されている資料をご提供いただきました。引き続き資料の収集を行うとともに、平成30年度の「資料編(上)」の刊行に向けて、掲載する資料や構成の検討を進めています。部会開催1回。



ふるさと府中歴史館で保存している行政文書の整理を行っています。

民俗専門部会

車返本願寺檀家の有志の方々(車返本願寺結衆講)が伝承する双盤念仏(都指定無形民俗文化財)を取材させていただきました。車返本願寺の施餓鬼や芝増上寺の御忌大会で法要を行う他、今年11月12日には車返本願寺で約10年振りに十夜念仏を行うため、月に2回以上の練



施餓鬼法要で双盤念仏を行う車返本願寺結衆講の皆さん

習を重ねています。

なお、民俗部会では刊行物発行に向けて原稿の作成等に取り組んでいます。

自然専門部会

自然部会では、8月24日に馬場大門のけやき並木周辺の気温測定調査を行い、市内の小・中学生11名に調査員として参加していただきました。

調査直後の簡易集計では、けやき並木周辺とそれ以外に温度差があるかどうかを明確に捉えることができませんでしたが、その後の精密集計の結果、夏にはけやき並木の東側の気温が一番低く、その次に西側が低くなり、けやき並木から東西に離れるにつれ気温が高くなるという傾向があることがわかり、けやき並木に気温低減効果があることを確認できました。

今回の調査結果や、平成27年度より継続している市内の気温・湿度の定点観測の結果を、市史の基礎資料として活用する予定です。部会開催1回。



大國魂神社前での気温測定調査

市史編さんの活動記録

前号以降

昨年度より継続

原始・古代 文学史料採録調査
原始・古代 文献史料の綱文・訓読・解説作成
原始・古代 考古資料採録調査
民俗 ライフヒストリー・講中・行事調査
4月28日 原始・古代 文献分野会
5月13日 近世 専門部会
6月29日 市史編さん審議会開催
6月30日 近世 個人宅古文書調査
7月7日 近世 専門部会
7月10日 近・現代 専門部会
7月10日より継続 近現代 行政文書調査

7月18日 近世 個人宅古文書調査
7月21日 原始・古代 文献分野会
8月10日 近現代・自然 府中市郷土の森公園調査
8月22日 中世 専門部会
8月24日 自然 ケヤキ並木クールスポット調査
9月4日 近世・近現代 花蔵院調査
9月8日 自然 高安寺・東郷寺植生調査
9月14日 自然 専門部会
9月26日 近世 専門部会
10月8日 展示解説「地図にみる近代の府中」
10月13日 原始・古代 文献分野会

第2期 府中市史編さん審議会委員

府中市史編さん審議会は、府中市史編さんに関する事項について審議します。

このたび、第2期の府中市史編さん審議会委員が選任され、6月29日に審議会を開催しました。

前号以降、次の皆様にご協力をいただきました。ありがとうございました。(五十音順・敬称略)

赤堀久美子、荒一能、石川裕三、市川閲子、市川千秋、市川紀子、市川仁、市川裕太、大川徹、大熊雅弘、大淵幹生、岡寄欣司、岡寄修三、加賀見省一、金井登久子、金井洋、神谷海純、鴨下長治、神戸航介、菊地幹雄、北原龍二、久保静江、小西信生、小林尚子、進藤礼治郎、鈴木義信、高木まどか、田中誠一、田中健司、谷口洋之、永田玲奈、外池昇、中村憲司、原祥、比留間正次、比留間れい子、松澤保、宮井迅吉、森憧太郎、山下隆久

間島神社祈祷念仏、安養寺、大國魂神社、車返本願寺結衆講、花蔵院、高安寺、善明寺、天台宗典編纂所、東京外国語大学、東京農工大学、東郷寺、八幡宿講、府中市史談会、本願寺、公益財団法人府中文化振興財団

第3回 市川裕太さん

府中市郷土の森公園内にある、交通遊園をご存知でしょうか。ゴーカートや足踏み式のカートで遊べるほか、現役を引退した本物の車両を見たり、一部は中に入ったりすることが出来るなど、大人も子供も楽しめる充実したテーマパークとなっています。その中でも一際目を引くのが、蒸気機関車 D51、電気機関車 EB10、そして都電 6191 号でしょう。

今回は、「都電 6191 号修復グループ」のメンバーとして活躍されている市川裕太さんにお話をうかがいました。

市川さんは、杉並区生まれ。6歳の時に国分寺に引っ越してきました。さらに高校生の終わり頃に府中へと引っ越し、10年近くお住まいだったそうです。

物心がついたころには鉄道が大好きになっていたそうで、府中の鉄道では下河原線に興味を持ち、府中の図書館の郷土史のコーナーでよく調べていたとのこと。

また、国分寺から自転車で交通遊園へ遊びにも来ていました。その頃の 6191 号は内部も開放されていて、外側には 4154 のダミー番号が書かれていました。しかし、年月が経つにつれて、次第に傷みが激しくなっていき、撤去されてしまうのではと心配しながら見ていたそうです。

解体が危ぶまれる中、平成 16 年に当時交通博物館の学芸員だった岸由一郎さんを中心に「都電 6191 号修復グループ」が結成され、ボランティアによる修復が始まりました。その活動を偶然見かける機会があったのが、メンバーに加わるきっかけだったと市川さんは言います。岸さんは平成 20 年の岩手・宮城内陸地震で被災し、若くして亡くられるという不幸がありましたが、彼の遺志を受け継いだメンバーによって修復が続けられています。

メンバーは修復のプロではないため、手探

りでやっていかなければならない難しさがある一方、色々な人とつながりができることや調べたことを実物に反映させることがこの修復活動の醍醐味であるといいます。

修復にあたっては、車両の塗装の色や文字表記の位置や形などを丹念に調べ、細かい部品にいたるまで図面に起こし、後に残せるように資料化がはかられています。さらに、車内の内装や路線図、広告にいたるまで忠実な再現を試みており、修復が完了した時には、走っていた当時の息づかいを感じることが出来るでしょう。

最後に、市川さんは 6191 号をはじめとする貴重な車両が、交通遊園にありつづけてきた事も重要だといいます。現役時代には府中とはゆかりのない車両でしたが、長い間公園にうちに、「府中の交通遊園に行けば見られる貴重な車両」となっています。交通遊園とそこにいる車両たちは府中の人々にとってどういう存在なのか。そして、その中で市川さんたちの修復活動はどう位置づけられるのか。今回の市史でも取り上げるべきテーマとなるのではないかと思います。

交通遊園の車両については、市の都市整備部公園緑地課郷土の森公園管理事務所（042-364-7214）まで。



都電 6191 号と市川裕太さん

府中市史編さんだより 第4号 平成 29 年 (2017)11 月 8 日

編集・発行

府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当

〒 183-0023 東京都府中市宮町 3 丁目 1 番地 ふるさと府中歴史館

TEL 042-335-4376 <http://www.city.fuchu.tokyo.jp/bunka/bunka/shishihensan/>